［巻頭企画］

DAKAR RALLY 2017

大会概要
〈開催期間〉1月2日〜14日
〈開催国〉パラグアイ・ボリビア・アルゼンチン

南米大陸を舞台に激闘が繰り広げられた、ダカールラリー2017。

日野自動車は、今年も菅原義正ドライバーと菅原照仁ドライバーの親子とともに「日野チームスガワラ」として参戦し、排気量10リットル未満クラスの8連覇と初参戦以来連続26回目※の完走も達成しました。

大会には、エンジンのパワーアップとサスペンションの耐久性・路面追従性を図った2台の日野レンジャーで参戦。菅原照仁ドライバーが運転する2号車は排気量10リットル未満クラスで優勝。トラック部門総合では8位となり、2012年以来5年ぶりにベスト10入りを果たしました。また菅原義正ドライバーは、1号車で同クラス2位（総合29位）を獲得しました。

“世界一過酷なラリー”で、排気量が倍近くある世界のモンスタートラックと戦い、偉業を成し遂げた日野チームスガワラの熱戦の模様をお伝えします。

※政情不安で中止となった2008年大会をはさんで、1991年以来連続26回目の完走となります。

Make a History
HINO TEAM SUGAWARA

ゴール後、応援メッセージが寄せられた旗を掲げるメカニックの皆さん。

サポートカーでメカニックの移動を支えた、日本レーシングマネージメントの田中宏治さん（左）と日野自動車の島崎耕平さん。

日本から駆けつけた日野自動車の市川正和代表取締役会長（右から3人目）と勝利を喜ぶ、1号車の菅原義正ドライバー（右から2人目）、髙橋 貢ナビゲーター（右端）、2号車の菅原照仁ドライバー（左から3人目）、杉浦博之ナビゲーター（左から2人目）。

万全の状態でレースに臨めるよう車両の整備に努めた、日本レーシングマネージメントの鈴木誠一メカニックリーダー（中央）と日野自動車の中村昌樹メカニックサブリーダー（左端）。

歓喜の胴上げで宙に舞う、菅原照仁ドライバー。

［インタビュー］

激しい雨と気温の高低差が大敵でした

今回も期待に応える力走を見せた、「日野チームスガワラ」。ダカールラリーのレジェンドである菅原義正ドライバー、念願のシングルフィニッシュを果たした菅原照仁ドライバーのお二人に、過酷だったレースを語っていただきました。

各ステージの前日に渡される、1日の行程が記載されたロードブック。区間距離と目標物のみの表記を頼りにチェックポイントを通過しなくてはならず、ナビゲーターの経験と判断力が求められます。

レース中の昼食は、パスタやチーズ、ナッツ、菓子類などのセットが支給されます。

近年にない厳しいレース

本誌：大会を振り返り、どのような印象をお持ちですか？

菅原照仁（以下、照仁）：ここ数年、つねに天候に悩まされていましたが、今年が一番ひどかったですね。大会前は大干ばつであると聞いていたのですが、始まったら大豪雨。コースが泥沼のようになったし、土砂による道路寸断の影響でステージがキャンセルになったり。気温もスタート地のパラグアイは40℃を超え、湿度も高くて夕方にはスコールに見舞われました。でも、ボリビアでは最低が2～3℃、最高でも8℃ほどにしかならなくて。

菅原義正（以下、義正）：ヒョウが降ったこともあったんです。競技者にとって、それはもう過酷な環境。激しい雨と気温の高低差、これが大敵でした。

本誌：体調管理はどのように？

照仁：日本から使い捨てカイロや、保温効果に優れた寝袋を持参。また、長靴や傘なども持って行きました。それと『酸素濃縮器』という酸素の濃度を上げる装置は、標高3,000mオーバーの高地を走る時に役立ちました。

ルール変更で難しい戦いに

本誌：今年からルールが大きく変わりました。

照仁：はい。ラリーにはステージごとにいくつもチェックポイントが設けられていて、そこを必ず通過しなくてはいけません。ポイントの場所は主催者側から渡される指示書に記されていて、これまでだとポイントに近づくと、クルマに搭載したGPSに矢印が表示され進むべき方向が分かりました。しかし、今回のルール変更によって表示されなくなり、これまでに増してナビゲーターに正確な判断が求められるようになりました。

義正：従来だったら、我々の前を走る車両の轍をたどることも戦略の一つだった。でも、今回からそうしていると先行車がコースを間違えた場合、後ろのクルマも一緒にミスしてしまうんです。

照仁：ドライバーとナビゲーターとの連携プレーが一層必要になり、ラリー本来の難しさ、面白さがアップしたといえますね。

メカニックは大切な財産

本誌：今回もまた、メカニックの皆さんが活躍されました。

照仁：ダカールラリーの前に、モスクワ～カザフスタン～北京を走破するシルクウェイラリーにエントリーし、実戦のなかで経験を積んだのが大きかったです。

義正：社内のテストコースを使ったトレーニングだけでなく、本物のラリーを肌身で感じてから本番に臨む。今回、そのプロセスの必要性や重要性をチーム全員が分かったと思います。メカさんたちは、こうした貴重な体験を今後にどう活かしていくか。それぞれの会社に戻った後、さらにレベルアップして後に続く人材を育ててほしい。これまでダカールラリーでメカさんたちが蓄積してきた技術や経験は、日野自動車にとってかけがえのない財産といえるでしょう。

本誌：毎年、たくさんの志願者のなかから選ばれていますが、選考基準は？

義正：チームで戦うため、協調性が大切です。それから技術力。精神的なタフさも重視しています。

照仁：2016年度は、面接だけで判断するのではなく、1週間くらい一緒に作業するなかでしっかり見極めるようにしました。

本誌：では、今後の抱負をお願いします。

義正：まずは体力づくり。体調と相談しながら、体操などでコンディションを整えていきます。

照仁：ライバルチームが戦力アップするなか、トラック部門総合でシングルの順位となったのは大きな自信になりました。チームはまだまだ強くなります。トップ5入りはそう簡単ではありませんが、実現のために何をすべきか。それを一丸となって追求していきたいと思います。

『排気量10リットル未満クラス』優勝の盾と完走メダル。

菅原義正・照仁ドライバーのダカールラリー15回以上出場の功績をたたえ、主催者から『DAKAR LEGEND』が贈られました。

菅原義正（すがわら よしまさ）（左）
1941年5月31日生まれ。北海道小樽市出身。日本レーシングマネージメント株式会社取締役会長。60年代からモータースポーツの世界に入り、今なお現役として活躍している日本レース界の草分け的存在。連続出場記録34回は大会最多となる。

菅原照仁（すがわら てるひと）
1972年7月13日生まれ。東京都港区出身。日本レーシングマネージメント株式会社代表取締役。98年、メカニックとしてダカールラリーに初参加。05年からは親子ドライバーによる日野レンジャー2台体制でダカールラリーに挑戦している。

Playback DAKAR RALLY 2017

今大会も、全国の日野販売会社から選抜されたメカニックが整備を担当。“世界一過酷なレース”の完走をサポートした皆さんにレースを振り返ってもらいます。

吾妻広之（あづまひろゆき）さん

福島日野自動車株式会社（販売会社として初選出）

標高4,000mの高地では酸素が薄くて体が思うように動かず、防寒着を何枚重ねても、ものすごく寒い。その上、作業後は水のシャワーが当たり前の状況でしたが、この経験で世界中どこでもどんな状況でも整備はできると思えるようになりました。ダカールラリー出場を応援していただいたみなさまに良い報告ができます。

井上順也（いのうえじゅんや）さん

岡山日野自動車株式会社（販売会社として初選出）

本戦で使用する車両の製作に最初から携われ、車の構造を改めて見直す良い機会になりました。レース中は整備で徹夜が続き、ほとんど睡眠時間がとれなかったことがきつかったですね。困難なことも辛いこともありましたが、やりきったことは大きな自信につながりました。今回の経験・知識を仕事に活かしていきたいですね。

中村浩司（なかむらこうじ）さん

石川日野自動車株式会社

“日野自動車で働けばダカールラリーに関わることができる”と思い、入社から21年。その夢を実現することができました。夢が叶ったというより、積み重ねた時間が夢を叶えてくれたという思いです。ダカールラリーで経験してきたことを後輩にどんどん伝えて、メカニックの技術向上につなげていきます。

國本賢治（くにもとけんじ）さん

広島日野自動車株式会社

現地入りしてからも、妻が子供の写真や動画をこまめに送ってくれました。家族からの応援は嬉しかったですね。経験豊富なドライバーである菅原義正さん・照仁さんからは、精神面でのアドバイスもたくさんしていただいて心強かったです。世界に通用するメカニックを目指して、さまざまなことにチャレンジしていきたいと思います。

Congratulations!